月刊ウィーン GEKKAN-WIEN

Monatsmagazin Japanisch

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙

創刊平成元年　創刊 30 年目　Nr. 343
2018年3月号

Moritz Michael Daffinger
Porträt Marie Daffinger, 1828
Aquarell auf Elfenbein
(c) Privatbesitz

アルベルティーナ美術館
「ウィーン水彩画」展にて展示

杉本純の 原子力の話 II ウィーンと京都 76

筆者が勤務する東京工業大学グローバル原子力安全・セキュリティ・エージェント教育院は、文部科学省の支援によりグローバルな原子力危機の分野において、国際的リーダーとして活躍する人材を育成することを目的とした修士・博士課程一貫の学位取得プログラムを実施している。このプログラムは、高い志を持って、人々、社会、および世界のために貢献するリーダーを育成することを教育目標としている。学生は全寮制の「世界原子力安全・セキュリティ道場」に入門し、一部の教員も学生とともに住み、学生が互いに切磋琢磨する教育環境を整えている。この活動の一環として、学生がサイエンスカフェを自主的に開催している。

寮としている東京国際交流館に住む海外からの留学生や研究者、またその家族を対象として、原子力に関連するテーマについて講演を行うことにより、原子力についての理解を深めてもらうとともに、参加者間の交流を進めることがサイエンスカフェの目的である。二〇一六年十月に開催されたサイエンスカフェは、「放射線とは何か?放射線を見てみよう!」というテーマで、座学だけでなく、参加者がみずから実験を行うことにより、放射線についての理解を深めた。東工大の学生九名と教職員五名を含め、二二出身国から計三三名の参加があった。最初に東工大の松本准教授より放射線に関する講演ののち、放射線を可視化することができる簡単な霧箱実験キットを使い、参加者一人一人が実際に放射線を目で見る実験を行った。普通の講演会とは違い、お茶を飲んだりお菓子をつまみながら、終始和やかな雰囲気のなか、放射線の知識を学ぶことができた。終了後の参加者アンケートでは、とてもよかった、またしてほしいなどの意見が多くあった。開催した学生達も、日ごろ理解しているつもりの放射線でも、全く知らない人に伝えることの難しさやコミュニケーションの楽しさを学び、充実した時間を過ごすことができた。(本文、写真とも写真中に記載のurlより)

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市のテニス事情について述べてみたい。先月号までウィーンのサッカー、スケート、スキーを紹介したが、ウィーン市民は一般にスポーツ好きである。テニスも冬場以外はドナウ公園の無料コートや有料のクラブコートがあちこちにあり、土日はもとより平日の夕方も盛んにテニスを楽しんでいる。室内テニスコートが多くあることから、冬場でさえ外では雪が降っていても、暖房でポカポカした所でテニスを楽しむ人が少なくない。国立オペラ座の音楽監督を務めておられた指揮者の小澤征爾さんもテニスがお好きで、日本大使館のグループと一緒に良くプレーをしておられたのは地元の日本人の間では有名な話である。

一方京都では、御所や西院公園を初めとして、一般向けのテニスコート、テニスクラブなどがやはり数多くある。日本テニス協会による平成二四年度テニス環境等実態調査報告書によれば、各都道府県の十才以上の人口に占めるテニス人口の割合であるテニス実施率は、六・一%の東京、神奈川、兵庫、千葉についで、京都府は愛知と並び四・九%で第五位である。同書によれば、六十才以上のテニス人口がこの十年位で全国的に急増しているとのことであるが、御所のテニスコート前を何度か通った時の印象にまさに合致している。京都は昔ほど雪が降らないので、冬でも十分テニスが楽しめる。両市では、老若男女が一年中テニスを楽しんでいるのが共通している。

余談であるが、著者はウィーン滞在時、日本人のテニスグループに所属して、土曜の午後に冬場も含めてテニスを楽しんだ。京都では、学生時代に高校のテニス部員だった同級生に初めて硬式テニスを教えてもらった。おかげで研究所時代もしばしばテニスを楽しむことができた。両市のテニス事情を紹介できた幸運に感謝しつつ、ドナウ公園のテニスコートの写真を掲載させていただく。

■杉本純　前京都大学教授
元原子力機構ウィーン事務所長■